

平成31年度

一般入学試験B日程 学科試験問題

国語

1. 試験時間は、60分間です。
2. 問題は、この冊子の1～20ページにあります。解答用紙は別に2枚あります。
3. 解答は、解答用紙の問題番号に対応した解答欄に記入してください。
4. 問題や解答を、声に出して読んではいけません。
5. 印刷の不鮮明、用紙の過不足については、申し出てください。
6. 問題や解答についての質問は、原則として受け付けません。
7. 終了の合図があったら、すぐ筆記具を置いて、解答用紙を机の上に伏せてください。
8. この問題用紙は、持ち帰らないでください。
9. 不正な行為があった場合は、解答をすべて無効とします。
10. 答案の文字は、ていねいに、かつ明瞭正確に書いてください。
11. その他、試験の進行については、監督者の指示に従ってください。

植草学園短期大学

受験番号		氏名	
------	--	----	--

第一問 次の文章を読んで、後の問い（問1～7）に答えなさい。

人類は大躍進時代の訪れとともにオーストラリア・ニューギニアへアイジユウし、それにつづいてユーラシア大陸の最寒冷地にも住みはじめている。ネアンデルタール人はどうだったかというところ、彼らは大躍進時代の前の氷河期を生き抜いていたので寒さには慣れていたが、ドイツ北部やキエフ以北に住むことはなかった。彼らは縫い針というものを持たず、衣服を作ることができなかったし、暖をとれるような住居も持っていなかった。このように厳寒を生き抜くために必須の技術を持っていなかった彼らが、ユーラシア大陸の最寒冷地に住んでいなかったのは当然といえれば当然であり、まったく驚くにはあたらぬ。身体的な構造が現代人と同じ人たちが居住地をシベリアまで拡大していったのは約二万年前である（もつと以前だとする説もある）。マンモスやケナガサイ（有毛サイ）が絶滅したのはおそらくそのためだろう。

オーストラリア・ニューギニアに定住したことで、人類は五大大陸のうちの三つの大陸に住むようになった（この本を通じて、私はユーラシアを一つの大陸と数える。また、十九世紀になるまで人類が到達することがなかった南極大陸は、一度も自活できる住民がいたことがないので除外している）。この時点で、人類が居住していないのは南北アメリカ大陸だけとなった。旧世界からアメリカ大陸に移動するには、海上を舟で渡るか、ベーリングの陸橋を歩いて行くしかなかった。舟の遺物は、インドネシアでは四万年前、ヨーロッパではもつとずっとあとになるまで出土していない。ベーリングの陸橋を渡るにはシベリアに住みつくことが必要であったが、これは先にふれたように二万年前になって初めて実現しているから、南北アメリカ大陸への定住がいちばん最後になったのである。

とはいえ、人類が南北アメリカ大陸に住みはじめたのが三万五〇〇〇年前から二万四〇〇〇年前のあいだのどの時期かは、はつきりしているわけではない。アラスカの遺跡で見つかっている紀元前一万二〇〇〇年頃の人骨は、アメリカ大陸で見つかったもつとも古い人骨とされているが、カナダとの国境付近やメキシコとの国境付近でも、紀元前一万数千年前後の何百年間にまでさかのぼる遺跡から人骨が発見されている。メキシコとの国境付近の遺跡はニューメキシコ州のクローヴィスという町にあることから、クローヴィス式遺跡と呼ばれている。ここでは、特徴的な大型の石製の投げ槍用尖頭器が最初に発見された。なお現在では、アメリカ合衆国の南部および西部の四八州からメキシコにつながる広大な地域にまたがって何百

ものクローヴィス式遺跡が存在することが知られている。この地域に進出したほとんど直後とやっていい時期に、人類はアマゾン川流域とパタゴニア地方にたしかに進出してきている。これらの事実から、北アメリカ大陸にやってきた人類はまずクローヴィス式遺跡に住みはじめ、人口の増加とともに南北両大陸で居住地域を広げていったと考えられる。

そう考えると、クローヴィスの子孫たちは一〇〇〇年もかけずに合衆国・カナダ国境から八〇〇〇マイル(約一万二八〇〇キロ)も南に移動しパタゴニアに到達したことになるが、この速度はさほど驚くべきものではない。一〇〇〇年で八〇〇〇マイルということは、年平均八マイル(約一三キロ)の南下である。狩猟採集民だった彼らにとって、そのぐらいの距離は一日の食料探しに行く程度のものであり、軽くこなせる距離であったと思われる。

また、私の「イカイシヤク」によれば、パタゴニアにむかつて南下しなければならなかったほどの人口増加が北アメリカにあったことになるが、この想定もさほど驚くにはあたらない。たとえば、当時の人口密度を一平方マイルあたり一人弱と想定しただけで、南北アメリカ大陸には一〇〇〇万人の狩猟採集民が住んでいた計算になるが、一〇〇〇万という数字は、最初に定住した一〇〇人の人類が年一・一パーセントで増加した場合、一〇〇〇年もたたないうちに到達してしまう数字である(一平方マイルあたり一人というのは、十分にゆとりをもった数字である)。年一・一パーセントという人口増加率も、未踏の島に人が住みはじめた場合の増加率にくらべればきわめて低い想定である。たとえば、英国戦艦『バウンティ号』の反乱者(一七八九年)と、そのタヒチ人の妻たちがピトケアン島に住みはじめたときは、三・四パーセントという高い人口増加率が認められている。

クローヴィスの狩猟採集民が北米到着直後の数世紀のあいだにおびただしい数の遺跡を残していることは、ニュージールランドに移住したマオリ族の祖先のケースと似ている。彼らも非常に多くの遺跡を残していることが最近の考古学研究で明らかになっている。それよりずっと古い年代にヨーロッパに進出した人類も、オーストラリア・ニューギニアへ移住した人類もまた、きわめて多くの遺跡を残している。つまり、歴史上、未踏の地に人類が住みはじめたときには、アメリカ大陸で起こったことと^A同じことが起こっているのである。

クローヴィス式遺跡は紀元前一万一〇〇〇年あたりに集中している。その意味するところは何か。なぜ紀元前一万六〇〇〇年や紀元前一万一〇〇〇年ではなく紀元前一万一〇〇〇年あたりに突然出現しているのか。それは、シベリアが常に寒かつ

たことと、最終氷河期を通じてカナダ全域が氷で覆われていて人間が通過することができなかったことが関係している。厳寒に立ちむかうのに必要な技術は、約四万年前に身体的^ウトクチヨウが現生人類と同じ人類がヨーロッパに入り込んでから生まれている。シベリアに人類が住みはじめたのは、それからさらに二万年たってからである。ベーリング海峡は今日ですら五〇マイル（約八〇キロ）しか離れていないので、初期のシベリア住民はベーリング海峡を横断してアメリカ大陸へ移動したと考えられる。おそらく、海上を舟で渡ったか、海面が下がり陸橋となっていた部分を歩いてアラスカへ渡ったのだろう。ベーリング海は、一〇〇〇年ほどの間隔で海峡となったり陸橋となったりすることを繰り返しているが、陸橋であったときは、幅が一〇〇〇マイル（約一六〇〇キロ）にもおよぶ開けた凍原^{ツンドラ}として存在していた。したがって、寒さに順応できる人たちがあれば、容易に歩いて渡ることができた。この陸橋は、紀元前一万四〇〇〇年頃に海面が上昇した結果、水没し、ふたたび海峡となっている。初期のシベリア住民が徒歩で移動したにせよ舟を使ったにせよ、紀元前一万二〇〇〇年頃のアラスカにはすでに人類がいたことを示すたしかな^エシヨウコが見つかっている。

最終氷河期を通じてカナダ全域を覆っていた氷床は、現生人類がアラスカからパタゴニアに移動するうえでの最後の障壁となっていたが、紀元前一万二〇〇〇年頃からその一部が融けはじめ、カナダを南北に横断する回廊が形成されたため、そこを通ることによってアラスカ住民は初めて北米大陸の大平原に移動することができた。彼らが最初にやってきた場所は、現在のカナダのエドモントン市のあたりである。こうしてようやく南下してきた移住者たちの目には、大平原が獲物だらけに映ったはずである。彼らは人口を増やし、居住地を徐々に南に広げ、北米大陸全体に住むようになったのではないかと思われる。

カナダ全域を覆っていた氷床の南側に人間が住むようになったことで起こった現象のなかには、すでにクローヴィス式遺跡との関連で指摘した大型動物の絶滅と一脈通じるものもある。もともとアメリカ大陸は、オーストラリア・ニューギニアと同じように大型動物に満ちていた。一万五〇〇〇年ほど前のアメリカ西部には、ゾウ、馬、ライオン、チーター、さらにはラクダや地上性オオナメケモノなどといった珍しい動物までもが群れをなして棲んでいた。しかし、オーストラリア・ニューギニアと同じように、アメリカ大陸でもこれらの動物はほとんど絶滅してしまった。しかしこの絶滅は、オーストラリアでは三万年前に起こり、アメリカ大陸では一万七〇〇〇年前から一万二〇〇〇年前のあいだに起こっている。大量に出土し

ている獣骨がいつごろのものかが^オセイカクに測定されているアメリカ大陸の動物については、絶滅年代を紀元前一万一〇〇〇年頃と特定できる。なかでもグランドキヤニオン地域の地上性シヤスタナマケモノと高山ヤギは、もつとも正確に年代がわかっており、二種とも紀元前一万一〇〇〇年前後の数百年のあいだに姿を消してしまっている。偶然かどうかはともかく、この時期は、多少の誤差はあるにせよクローヴィスの狩猟民たちがグランドキヤニオン地域にやってきた時期でもある。

しかし、肋骨のあいだにクローヴィス型投げ槍用尖頭器が刺さったマンモスの骨がたくさん見つかったことから、^Bこれは偶然の一致ではないと思われる。アメリカ大陸を南へと広がっていく過程で、それまで人類を知らなかった大型動物と出くわした狩猟民たちは、それらの動物が簡単にしとめられるとわかって、彼らを絶滅させてしまったと考えられる。これに対しては、最終氷河期末期の紀元前一万一〇〇〇年頃に気候の大変動があり、それによって大型動物が死に絶えた、とする反論もある。

(ジャレド ダイアモンド 倉骨 彰 訳 『銃・病原菌・鉄』より)

*出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問1 片仮名ア〜オを漢字にしなさい。

問2 クローヴィスとはどこの国の町か答えなさい。

問3 南北アメリカ大陸への人類の進出を阻んでいた原因として最も適する言葉を、本文中から三文字で抜き出しなさい。

問4 「クローヴィス式遺跡」の出現、分布時期として最も適するものを、解答欄に沿うよう答えなさい。

問5 傍線部A「同じこと」とは何か。最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 大型動物を絶滅に導くこと。
- 2 未踏の地に人類が住みはじめたこと。
- 3 多くの遺跡を残していること。
- 4 人類が通過できなかったこと。

問6 傍線部B「これ」とは何か。最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 人類の入植と動物の絶滅の時期が重なること
- 2 クローヴィス型の槍がマンモスと共に発見されること。
- 3 気候の大変動が紀元前一万一〇〇〇年頃にあったこと。
- 4 狩猟民たちがグラントキヤニオン地域にやってきたこと。

問 7 問題文の表題として最も適するものを、次の 1 ～ 4 の中から一つ選びなさい。

- 1 紀元前の人類
- 2 クロービス式遺跡
- 3 大型動物の絶滅
- 4 人類のアメリカへの進出

第二問 次の文章を読んで、後の問い（問1〜6）に答えなさい。

町一番の絹問屋の娘お留伊は十五歳。冷たく勝ち気で驕った心がうかがえる、目鼻立ちが極めて美しい娘である。小鼓の名手で、来る正月に都城で行われる鼓くらべで勝つため連日一心不乱に稽古をしているが、ここ数日それを庭の外から聴いている老人がいることに気づく。老人は旅の絵師と言い、町外れの松葉屋という宿で持病を養っているという。数日後松葉屋の娘がお留伊のもとに来て、病状の悪化した老人が死ぬ前にもう一度お嬢様の鼓を聴きたいと申すので来てほしいと告げる。お留伊が宿に行くとき老人は鼓を聴く前に話したいことがあるといって語り始める。

十余年まえに、観世市之丞と六郎兵衛という二人の囃子方があって、小鼓を打たせては竜虎と呼ばれていたが、二人とも負け嫌いな烈しい性質で、常づね互に相手を凌ごうとせり合っていた。……それが或年の正月、領主前田侯の御前で鼓くらべをした。どちらにとっても一代の名を争う勝負だったが、殊に市之丞の意気は凄しく、曲なかばに到るや、精根を尽くして打込む気合で、遂に相手の六郎兵衛の鼓を割らせてしまった。

打込む気合だけで、相手の打っている鼓の皮を割ったのである。一座はその神技に驚嘆して、「友割りの鼓」といまに語り伝えていく。

「わたくしは福井の者ですが」

と老人は話を続けた。「……あのときの騒ぎはよく知って居ります、市之丞の評判はたいそうなものでございました。……けれど、それほどのア面目をほどこした市之丞が、それから間もなく何処かへ去って、行衛知れずになったということをお守り存じでございませうか」

「それも知っています。あまり技が神に入ってしまったので、神隠しにあつたのだと聞いています」

「そうかも知れませんが、本当にそうかも知れません」

老人は息を休めてから云った。「……市之丞はある夜自分で、鼓を持つ方の腕を折り、生きていく限り鼓は持たぬと誓って、何処ともなく去ったと申します。……わたくしはその話を聞いたときに斯う思いました。すべて芸術は人の心をたのしませ、清くし、高めるために役立つべきもので、そのために誰かを負かそうとしたり、人を押退けて自分だけの欲を満足さ

せたりする道具にすべきではない。鼓を打つにも、絵を描くにも、清浄な温かい心がない限りなんの値打もない。……お嬢さま、あなたはすぐれた鼓の打ち手だと存じます、お城の鼓くらべなどにお上りなさらずとも、そのお手並は立派なものでございます。おやめなさいまし、人と優劣を争うことなどはおやめなさいまし、音楽はもつと美しいものでございます、人の世で最も美しいものでございます」

お留伊を迎えに来た少女が、薬湯を嚙む刻だと云って入って来た。……老人は苦しげに身を起して薬湯を啜ると、話し疲れたものか暫く凝乎と眼をつむっていた。

「では、聴かせて頂きましょうか」

老人はながい沈黙のあとで云った。「……もう是が聴き納めになるかも知れませんが、失礼ですが寝たまままで御免を蒙ります」

金沢城二の曲輪に設けられた新しい楽殿では、城主前田侯をはじめ重臣たち臨席のもとに、嘉例の演能を終って、すでに、鼓くらべが数番も進んでいた。

これには色々な身分の者が加わるので、城主の席には御簾が下されている。お留伊は控えの座から、その御簾の奥をすかし見しながら、幾度も総身の顫えるような感動を覚えた。……然しそれは臆れがしたのではない。楽殿の舞台でつぎつぎに披露される鼓くらべは、まだどの一つも彼女を懼れさせるほどのものがなかった。彼女の勝は確実である。そしてあの御簾の前に進んで賞を受けるのだ。遠くから姿を拝んだこともない太守の手で、一番の賞を受けるときの自分を考えると、その誇らしさと名誉の輝かしさに身が顫えるのであった。

やがて、ずいぶん長いときが経ってから、遂にお留伊の番がやって来た。

「落着いてやるのですよ」

師匠の仁右衛門は自分の方でおろおろしながら繰返して云った。「……御簾の方を見ないで、いつも稽古するときと同じ気持でおやりなさい、大丈夫、大丈夫きつと勝ちますから」

お留伊は静かに微笑しながらうなずいた。

相手は矢張り能登屋のお宇多であった。曲は「真の序」で、笛は觀世幸太夫が勤めた。……拝礼を済ませてお留伊は左に、お宇多は右に、互の座を占めて鼓を執った。

そして曲がはじまった。お留伊は自信を以て打った。鼓はその自信によく応えて呉れた。使い慣れた道具ではあったが、かつてそのときほど快く鳴り響いたことはなかった。……三ノ地へかかったとき、早くも充分の余裕をもったお留伊は、ちらと相手の顔を見やった。

お宇多の顔は蒼白め、その唇はひきつるように片方へ歪んでいた。それは、どうかして勝とうとする心をそのまま絵にしたような、烈しい執念の相であった。

その時である、お留伊の脳裡にあの旅絵師の姿がうかびあがって来た、殊に、いつもふところから出したことのない左の腕が！——あの人は觀世市之亟さまだった。

お留伊はイ愕然として、夢から醒めたように思った。

老人は、市之亟が鼓くらべに勝ったあとで自分の腕を折り、それも鼓を持つ方の腕を、自ら折って行衛をくりましたと云ったではないか。……いつもふところへ隠している腕が、それだ。——市之亟さまだ、それに違いない。

そう思うあとから、眼のまえに老人の顔があざやかな幻となって描きだされた、それからあの温雅な声が、耳許ではつきり斯う囁くのを聞いた。……音楽はもつと美しいものでございます、お留伊は振返った。そして其処に、お宇多の懸命な顔を見つけた。眸のうわずった、すでに血の氣を喪った唇を片方へひき歪めている顔を。

——音楽はもつと美しいものでございます。またと優劣を争うことなどおやめなさいまし、音楽は人の世で最も美しいものでございます。老人の声が再び耳によみがえって来た。……お留伊の右手がはたと止った。

お宇多の鼓だけが鳴り続けた。お留伊はその音色と、意外な出来事に驚いている客たちの動揺を聴きながら、鼓をおろしてじっと眼をつむった。A老人の顔が笑いかけて呉れるように思え、今まで感じたことのない、新しいよろこびが胸へ溢れて来た。そして自分の体が眼に見えぬいましめを解かれて、柔かい青草の茂っている広い広い野原へでも解放されたような、軽い活々とした気持でいっぱいになった。

——早く帰って、あの方に鼓を打ってあげよう、この気持を話したら、きつとあの方はよろこんで下さるに違いないわ。

お留伊はそのことだけしか考えなかった。

「どうしたのです」

舞台から下りて控えの座へ戻ると、師匠はすっかり取乱した様子で詰った。「……あんなに旨く行ったのに、なぜやめたのです」

「打ち違えたのです」

「そんな馬鹿なことはない、いやそんな馬鹿なことは断じてありません、あなたはかつてないほどお上手に打った。わたくしは知っています、あなたは打ち違えたりはしなかった」

「わたくし打ち違えましたの」

お留伊は微笑しながら云った。「……ですからやめましたの、済みませんでした」

「あなたは打ち違えはしなかった、あなたは」

仁右衛門は躍起となつて同じことを何十回となく繰返した。

「……あなたは打ち違えなかった、そんな馬鹿なことはない」と。

父や母や、集っていた親族や知人たちにも、お留伊はただ自分が失敗したと告げるだけであつた。B誰が賞を貰つたかという^Bことももう興味がなかつた、ただ少しも早く帰つて老人に会いたかつた。森本へ帰つたのは正月七日の昏れがたであつた。疲れてもいたし、粉雪がちらちらと降っていたが、お留伊は誰にも知れぬように裏口から家を出て行った。

「まあお嬢さま！」

松葉屋の少女は、不意に訪ねて来たお留伊を見て驚きの眼を瞠^{なま}つた。……そして直ぐ、訊かれることは分つているという風に、

「あのお客さまは亡くなりました」

とあたりまえ過ぎる口調で云つた。「……あれから段々と病気が悪くなるばかりで、到頭ゆうべお亡くなりになりました。

今日は日が悪いので、お葬いは明日だそうでございます」

お留伊は裏の部屋へ通された。

老人は北枕に寝かされ、逆さにした枕屏風と、貧しい櫛の壺と、細い線香の煙にまもられていた。……お留伊は顔の布をとってみた。衰えきった顔であった、つぶさに嘗めて来た世の辛酸が、刻まれている皺の一つ一つに浸みこんでいるのである。けれどいままでは終わった、cもうどんな苦しみもない。困難な長い旅が終って、老人はいまやすらかな、眼覚めることのない眠の床に就いているのだ。

D——ようなさいました。

お留伊には老人の死顔が、そう云って微笑するように思えた。

——さあ、わたくしにあなたのお手並みを聴かせて下さいまし。

「わたくしお教で眼が明きましたの」

お留伊は囁くように云った。「……それで色々なことが分りましたわ、今日まで自分がどんなに醜い心を持っていたか、どんなに思いあがった、たしなみ嗜のない娘であったか、ようやくそれが分りましたわ、それで急いで帰って来ましたの、おめにかかって褒めて頂きましたかっただけですから」

お留伊の頬にはじめて温かいものが滴った。それから長いあいだ、たもと袂で顔を蔽いながら声を忍ばせて泣いた。……長いあいだ泣いた。

「今日こそ本当に聴いて頂きます」

やがて涙を押し拭いて、お留伊は袂紗を解きながら囁いた。「……今までのようにはなく、生まれ変わった気持で打ちます、どうぞお聴き下さいまし、お師匠さま」

今はもう、老人が觀世市之亟であるかどうか確めるすべはない、けれどお留伊はかたくそう信じているし、またよしそうでないにしても、Eその老人こそ彼女にとっては本当の師匠であった。

(山本周五郎『鼓くらべ』より)

*出題の都合上、原文の一部分を改変してあります。

問1 傍線部ア～ウの本文における意味として最も適するものを、それぞれ後の1～4の中から一つ選びなさい。

ア 面目をほどこす

- 1 勝利を約束されていた人が、失敗をする
- 2 勝負には負けたが、評判だけは高くなる
- 3 立派な成果をあげ、一段と評価を高める
- 4 勝敗に関わりなく、世間的な名誉を得る

イ 愕然として

- 1 恐ろしさにふるえて
- 2 勢いよくおごそかに
- 3 ものに動じない様で
- 4 ひどく驚いたように

ウ 躍起となって

- 1 むきになって熱心に
- 2 間違いを責めたてて
- 3 おこって諭すように
- 4 おどろき跳躍をして

問2 傍線部A「老人の顔が笑いかけて呉れるように思え、今まで感じたことのない、新しいよろこびが胸へ溢れて来た」とありますが、このときのお留伊の心情として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 負けることでみにくい争いを終結させれば、老人に褒めてもらえるに違いない。
- 2 松葉屋で老人が語った言葉の真の意味を、身をもって理解できともうれしい。
- 3 眸がうわずっていて歪んだお宇多の顔を見ると、競うことは醜くくて可笑しい。
- 4 ここで競技をやめることで競う苦しみから解放され、安心できてよろこばしい。

問3 傍線部B「誰が賞を貰ったかということももう興味がなかった」とありますが、その理由の説明として最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 お留伊の小鼓の技量が誰よりも上だということは、関係する人にはわかっていたから。
- 2 鼓くらべで最後まで演奏していれば自分が賞をもらえたことは、確信できていたから。
- 3 このような結果にした気持を一刻も早く老人に知らせたいと、一途に思っていたから。
- 4 競うことを自ら避けた以上結果について論じることはできないと、得心していたから。

問4 傍線部C「もうどんな苦しみもない」とありますが、老人の苦しみの根源はどのようなことにあつたと考えられますか。最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 きわめて優れた小鼓の技を、名誉を争う勝負の具としたこと。
- 2 自ら腕を折り、片手だけで生きなければならなくなったこと。
- 3 大好きだった小鼓を演奏できずに、絵の道で生きてきたこと。
- 4 まずしい旅絵師の道を選んだために、孤独な死を迎えたこと。

問5 傍線部D「――ようないました」とありますが、これは(i)誰が、(ii)何をしたことに対する言葉ですか。(i)・(ii)について、簡潔に答えなさい。

問6 傍線部E「その老人こそ彼女にとってはその師匠であつた」とありますが、お留伊が老人から学んだことの本質を述べている一文の始めの五字を抜き出さなさい。

第三問 次の文章を読んで、後の問い（問1〜5）に答えなさい。

いつも私は、日本はもちろん、世界中のあらゆる人々の間に、ユーモアと笑いのタネを蒔き続け、ほほえみの輪を広げたいと念願している。

ユーモアと笑いには、人種や性別や年代を超えた温かいコミュニケーションを結ぶ働きがある。

ラッシュユアワリーの電車の中では、どんなに大勢の人と肩をすり合わせていても、全くコミュニケーションは成立しないが、寄席などで落語を聞いて一緒に笑うと、周りに座っている見知らぬ人とも、親しみのこもった一体感を感じ合える。

数年前に来日したアメリカのブッシュ大統領が、首相官邸での夕食会の席上、突然気分が悪くなって倒れて退席した時に、残ったバーバラ夫人がとっさに、次のようなユーモア溢れるスピーチをして、人々の笑いを誘い、見事に周囲の緊張を解きほぐしたことがあった。

「来日してから、毎日日本にすばらしい日々を過ごせて、感謝しております。大統領の代わりにスピーチをするのは、ごくまれなことですが、こうなったのは、すべてアマコスト駐日大使のせいです。といいますのは、今朝のテニスで、大統領は大使とペアを組んで、天皇と皇太子のペアに、ひどく負けたからです」

ア、アメリカでは、講演の中で必ず、五分に一度はユーモラスな話題をはさんで、人々の笑いを誘うことが常識となっている。

絶叫型の堅苦しい演説では、人々の関心を集めることができず、論旨をスムーズに理解してもらえないからである。

ところで、私は今、「死への準備教育」の普及を願って、大学の講義の合間をぬって、講演のために全国を飛び回っている。

地方の医師会主催の講演会の場合、よく前の晩の懇親会にも招待される。その時はまだ、私の顔を知らない人が多い。

懇親会の会場へ入ってきた私を見ると「あっ、ガイジンだ。英語を話さなければならぬ」という恐怖で、さっと顔を引きつけてしまう人がいる。

これでは「私には近づかないでください。私は英語がダメです」という無言のメッセージになり、近づこうとする私の足

を引き止めてしまう。

しかし、言葉を交わさなくとも、ニッコリしてくれる人もいる。

これは「ようこそ、どうぞ」という歓迎の気持ちの表れだろう。私も、ほっとしてその人のそばへ行き、日本語であいさつすることになる。

乾杯のあとはもう、だれとでも問題なく和やかなフンイキになるが、この表情が伝えるメッセージは、言葉よりも重要な効果を発揮することが多い。

口に出すあいさつはもちろん大切だが、たとえ言葉では通じなくても、あるいはもう手足も動かさず、口が利けないような状態になったとしても、人間は笑顔で周囲の人に感謝を伝え、心を通わせることができる。

私たちの日常的なコミュニケーションの八〇パーセントまでは、ちよつとした動作や、顔の表情での無言のコミュニケーションで成り立っている。

これからは、毎朝、鏡の前で身だしなみを整えるとき、まず、自分自身にっこりほほえみかけよう。そして、その笑顔を、今日一日出会うだれにでも向けてみてはどうだろうか。

せっかく人間だけに与えられたユーモアと笑いの能力を、人生の潤滑油として、たっぷり使って行きたいものである。

ユーモアについて、ドイツには「ユーモアとは、にもかかわらず笑うことである」という有名な定義がある。

これは、今自分は非常につらく苦しい状態にある。だが、^Aそれにもかかわらず、相手に少しでも喜んでもらおうと、ほほえみかける優しい心づかい——これが、愛と思いやりに満ちたユーモアの原点だという意味である。

悩みや苦しみのさなかにあってもそれに。溺れず、相手のためにやさしさを発揮するのが真のユーモア精神ではなからうか。

キリスト教の中心的なテーマは愛であり、イ、日常生活の中でどう表現していくかと言えば、やはり私は、人間としての自由の象徴とも言えるユーモアと笑いが、その具体的な表れになると考えている。

自分の愚かさを素直に認めて笑い飛ばせない人は、まだ狭い自己の殻に閉じこもっていて、真の意味で自由ではない。

結局、ユーモアと笑いは、神から人間に贈られた、すばらしいプレゼントに他ならない。『新約聖書』にも、「自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ」（マタイ二二章三九節）とあるが、これからの私たちは、ユーモアのセンスを自由に働かせて、広い視野から自分を捉え直して生きることが、ますます必要になる。

真に自分を愛せない人に、他人を愛することなど、到底不可能だろう。

人生の否定的な側面も、自己風刺のユーモアで、笑いながら受け止め、他人の欠点にも寛大に対応できるように心掛けたものである。

よくジョークとユーモアを混同する人がいるが、ジョークはタイミングの良さや、言葉の上手な使い方など、頭から頭へのテクニックであり、ユーモアは心から心へ伝える具体的な愛の表現だと思う。

こうしたユーモアのセンスを、生まれつきの才能だとか、物事が順調に行っていて、精神的に余裕があるしるしなどと、思い違いをしている人も多いが、ユーモアは最もつらく苦しい時にこそ、発揮されなければならない。

そうした時、まず笑いの対象にするのは、自分自身のドジな振る舞いである。

ウ、私は居眠りの名人だと自認している。

目下のところ、忙し過ぎて眠る時間が二、三時間しかない日が続くと、やむを得ず、講演に行く往復の飛行機や列車の中が、私のベッド代わりになる。私は腰掛けられれば、どこでもすぐに眠れるという特技の持ち主なのだ。

エ、これがしばしば間違いのもとになる。

この間もJR線の立川で講演した帰りに、新宿で座れたので、四ツ谷までの五分間を眠ろうと目をつぶって、気がついたら終点の東京駅だった。

こうした時、私は自分の失敗を悔やむよりも、まず、電車が東京止まりだったことに感謝する。山手線だったら、何回ぐるぐる回っていたかわからないからだ。

少々遅列して、大学の教室に駆け込んだ私は、早速、学生たちに自分の失敗談を、ヒロウして一緒に大笑いをした。

ユーモアには、

B

という大きな役割がある。

特に中年期からは、会社向け、家庭向けと、さまざまな仮面をかぶって生きていく必要に迫られることが多い。最初は仕方なくつけたつもりのは仮面が、いつか脱げなくなって、本当の自分自身の顔を見失ってしまったりする。

ユーモアと笑いは、そうした見せかけの仮面をはぎとって、本来の姿をさらけ出してくれる。

ありのままの自分を謙虚に受け入れる上でも、ユーモア感覚は、非常に大切な役割を果たす。

自分の失敗や欠点を周囲の人と一緒に笑い飛ばすユーモア感覚を磨くことは、これからの高齢化社会を明るく生き抜くためにも、大いに必要ではないだろうか。

(アルフォンス・デーケン『ユーモアは老いと死の妙薬』より)

※出題の都合上、原文の一部を改変してあります。

問1 空欄ア～エに入れるのに最も適する語を、次の1～4の中からそれぞれ一つずつ選びなさい。

- 1 ただし
- 2 たとえば
- 3 ちなみに
- 4 それを

問2 傍線部 a～d の、カタカナは漢字に、漢字は読みをひらがなで書きなさい。

- a 論旨
- b フンイキ
- c 溺れず
- d ヒロウ

問3 傍線部 A 「それ」とは本文中、どのような意味で使われているか、最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 他人の反対
- 2 やりたくないこと
- 3 他のやりたいこと
- 4 困難な状況

問4 空欄Bに入れるのに最も適するものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 社会人として礼儀をわきまえる
- 2 周りの人を和ませる
- 3 自己風刺と自己発見
- 4 日常的なコミュニケーション

問5 筆者のいうユーモアに、あてはまらないものを、次の1～4の中から一つ選びなさい。

- 1 悩みや苦しみにあっても、相手にやさしくする
- 2 豊かな才能や、精神的な余裕
- 3 心から心へ伝える具体的な愛の表現
- 4 最もつらく苦しい時こそ発揮される